国語研究委員会

1　研究テーマ

『確かな学力を育む授業』を生み出す教育力
国語科研究委員会研究テーマ
「読む力」を育むための指導はどうあったらよいか
——文学的文章において友だちとの関わりを通し
豊かに読みを深める授業はどうあったらよいか。——

2　研究内容（研究課題）

国語研究委員会では、昨年度に引きつづき本郡教育会中心講師の益地憲一先生（信州大学教授）のご指導を直接賜りながら「『確かな学力を育む授業』を生み出す教育力」を目指し、本年度よりスタートした新しい郡研究体制である「研究委員会が中心となって、独自性を生かし、日常的な授業実践となるような研究」となるよう推進してきた。とりわけ、益地先生のご指導の中心となっている「発表した子どもたちにどう対応するか」という「受け止める教育」の場面をどのように設定していくか、また、「受け止めたものをいかに児童生徒に返していくか」という視点を大切に、教師の主導性と学習者の主体性が兼ねあった授業づくりの工夫を課題として取り組んできた。

また、今日の国語教育の潮流に目を向けると、新学習指導要領の改訂では、ＰＩＳＡ調査や全国学力調査の結果を含めて、「言語活動の充実」が指摘され、「話す力・聞く力」と「読む力」とのバランスを見た場合、「読む力」の低迷が指摘されてきている。また、中央教育審議会答申（平成20年１月）の「改定の基本的な考え方」では「生きる力」を目指し、「基礎的・基本的な知識・技能」はもちろん、「活用して問題を解決する」というような国語の能力が求められており、「話す力・聞く力」と「読む力」の関連指導の大切さが伺える。

そこで今年度の国語科研究委員会では、標記のような研究テーマを設定し、研究をスタートした。主な研究内容及び研究方法は以下の通り。

1　児童生徒の実態把握（東中学校の実態を中心に）

児童生徒に、教材文の内容について友達と関わりを持ち自分の考えを進んで発言し読みを深めることに苦手意識を抱いている傾向が見られる。その原因を考察し指導仮説を明確にしながら実践研究を進めていく。

2　「読む力」を育む為の教材研究と学習場面について

児童生徒につけたい「読む力」についてその系統性を明確にし、個々の児童生徒が自分の思いや考えを互いに表現し合う場面はどのように設けていったらよいか、教材研究を深めながら実践研究を進めていく。

3　自主的研究と委員相互の授業公開

児童生徒の実態を踏まえ、指導仮説にもとづいて委員各自が実践研究を進め、互いの授業を見合う機会を持つように進める。

公開できる授業については全委員に案内を出し参観を呼びかけていく方向。

3　研究の成果

1　指導の実際

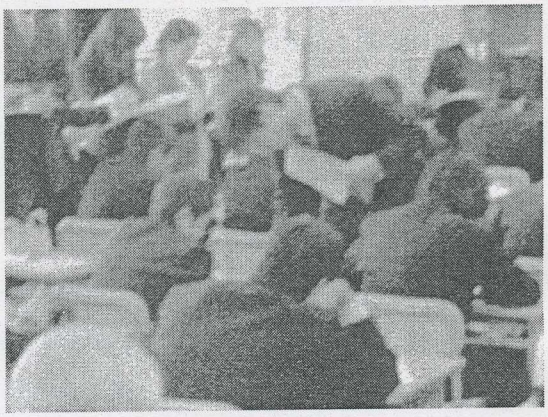
(1)　研究授業実施期日　　11月19日（水）

(2)　授業会場　　須坂市立東中学校

(3)　題 材 名　　「走れメロス」（太宰治）光村図書

(4)　学年・学級及び授業者　　2年2組担任　井出　宏幸　教諭

〈確かな学力に寄せて〉



①　文学的教材の読解・鑑賞の学習場面では児童生徒の「主体的学習の場」の保障が重要と考え、詳しい教材分析、教材研究を重ね実証授業を開催することができた。また、益地先生より事前授業等において直接授業づくりの要諦をご指導いただいた。

ⅰ　作品の構造と主題を授業者なりに捉え児童生徒にどのような単元構成で学習を進めていったら主体的効果的に読みが深まるかの見通しを持てるように教材研究を深め、語句相互の相関性を見出していく。

ⅱ　「初発の感想」を大切に、発表を通して学習課題を練り上げ、生徒にとって必要感のある共通課題を設定し、個人追究、共同追究を螺旋的に進められるよう読みが深まる展開を配慮・工夫する。（グループ学習の効果的位置づけ）

ⅲ　生徒の意識に沿った主題に関る重要語句をおさえ、叙述に着眼できる学習問題を作っていく。またそれらの構造化された板書計画を立てる。

②　小グループで友と関る場を設定し、拮抗するような話し合いの場面を大切に読み深めさせていくことは、学習を盛り上げ、情緒的な楽しさや学習参加の満足感を得ることができ、学習の意欲となっていくと考える。

③　友との関わりで学んだことを振り返られるように学習カードを工夫し与え、継続・蓄積を進めていくことで、学習評価と関連させていく。

④　文学言語の可能性を見出せるよう、論理的な側面と想像的な側面を学習の中で積極的に位置づけ展開していく中で、児童生徒に確かな言語能力を育てていくことができると考える。

2　この事例から明らかになったこと

(1)　構造化された板書の計画を生徒に提示していったことは、生徒に作品の構造を明確に意識させ、読み深めさせるのに効果的であったが、導入段階でやや時間がかかってしまった点を反省し、より柔軟で効果的板書が大切であった。

(2)　語句相互の相関性に気づかせ、叙述に着目していくような学習展開は生徒の論理的言語能力の育成には極めて重要である。

4　来年度への課題

(1)　授業者の指導性と学習者の主体性、それぞれが両立していく教材研究をどのように進めていったらよいか。

(2)　「受け止める教育」（益地先生）では、いかに児童生徒に作品内容に気づかせ整理していくか、その場に応じた授業者の対応や「返し」をどう進めたらよいか。